

「パンの国は近づいた！」かにぱんお姉さんコラボSS

『かにぱんとかにぱんお姉さんへ愛を込めて』

突然だが、俺はかにぱんが大好きだ。三立製菓のかにぱんが大好きなんだ。あのソフトな口当たりと素朴な甘さ、デフォルメされた蟹のかわいらしい形。そして何より、蟹の脚をもぐ楽しさ！ 他の食べ物には無い特徴を持つ、至高の逸品だと思っている。

ということだ。

「『かにぱん美味しいぞ教』の教典を作ることにした」

揺れる馬車の中。何かと暇な時間。そう宣言してみたら、エピに気の抜けた顔をされた。

「ねえ、タスク様。さっき言ってたけれど、それって本当にある宗教なの？」
「ああ、そうだぞ。今のところ信者は俺一人だが」

何といつてもついさつきできた宗教だからな。信者は総勢俺一名。皆の入信、待ってるぜ！

「まあ、この世界はこの世界でなんか宗教ありそうだしな。兼業ならぬ兼信を可能ってことにすれば信者、増えるかな……」

「えっ、増やしたいの？ やだあ……」

うん。増やしたい増やしたい。俺達の身の安全の為にも増やしたいし、それ以前に俺は純粋な気持ちで、かにぱんを宣教したいんだよ。だってかにぱん好きだから！ だから『やだあ……』とか言わない！

「ではかにぱん教典第一章一節」

「待って、タスク様。それ長くなる？ 長くなるの？」

……あんまり長くならないようにしよう。そうだな。シンプルイズベストという言葉がある。かにぼんの味わいのように、シンプルでさつくりと軽やかで飽きの来ない教典にすべきだろう。そもそも兼信メインの宗教の数百ページに及ぶ教典とか重すぎるだろ。物理的にも心理的にも。

よし。では改めて。

「初めにかにぼんは天と地を創造された。……いや、天と地っていうよりは、かにぼんの国を創造したことにしておいた方が軋轢が無くていいか」

よし。ということで決まり。教典の最初の一行は『初めにかにぼんはかにぼんの国を創造された』でいこう。これなら宗教戦争は起こらない。

「ちよ、ちよっと待って、タスク様。かにぼんの国、って何？」

「かにぼんお姉さんの故郷だ」

「か、かにばんお姉さんって誰？ さっきから分かんない言葉がいっぱい出てくるよう……」

まあ、エピは知らないよな。なんてったってここは異世界。かにばんお姉さんは勿論、かにばんですら存在しない世界なんだからな。布教し甲斐があるっでもんだぜ。

「かにばんお姉さんはなあ……かにばんの国からかにばん型の雲に乗ってお昼寝に出かけたなら日本に來ちゃった、十七歳の素敵なお姉さんだ。かにばんの美味しさを伝えておられる」

ちなみにかにばんお姉さん、若干クレイジーでらっしゃるところが大変によろしい。見てると元氣と狂氣が湧いてくる。なんかそういうお方なのだ。

「えーと、つまり、タスク様の世界で『かにぼん美味しいぞ教』を布教してる人なの？」

「布教じゃなくて広報だが。いやでも広報ってある意味布教か……？」

……そうだ。ある意味、広報とは布教。そう考えると『かにぼん美味しいぞ教』におけるかにぼんお姉さんって神の子ポジションに相当するお方なのではないだろうか。

……いや、神の子というよりは、かにの子。

「じゃあ、タスク様はタスク様の世界でかにぼんお姉さんと一緒に『かにぼん美味しいぞ教』を布教してたんだね」

「いや、俺の世界のかにぼんの布教はかにぼんお姉さんお一人で十分だ」

かにばんお姉さんがいらっしやる以上、俺の出る幕は無い。俺以外も出る幕は無い。もうかにばんお姉さんだけでいいと思う！

そうしてかにばんお姉さんの何たるかを話していたところ、エピはふと、なんとなくもぞもぞしながら聞いてきた。

「あの……タスク様はその、かにばんお姉さんっていう人が、好きなの？」
……なんとということだ。これは難しい質問だな。

「好きか嫌いかと言われれば好きだ。だが、かにばんお姉さんとかにばんとどちらが好きかと言われたらかにばんだ」

「あつ、そもそもそういう類の『好き』なのね……？」
そりゃそうだ。他に何があるっていうんだ。

「かにぱんお姉さんは……同じ方向に向かっていく同志、或いは先駆者。そういうかんじだ。尊敬はするが信仰はしていない。すごいとは思うがなりたいとは思わない。そういうかんじなんだ」

若干失礼な感想になっている気もするが、実際そうなんだからしようがない。すげえとは思うが色々な意味で真似はできない。かにぱんお姉さんはそういう人なのだ。

「ついでに見ていて面白い」

「そういうかんじなの……？」

そういうかんじなの。そうなの。これが俺なりのかにぱんとかにぱんお姉さんへの愛の形なの。

「じゃあ……えーと、なんだ。『汝かにぱんを愛せよ』『かにぱんを求めよさすれば与えられん』『しよんぼりしちゃう時にはチョツキンチョコキチョコキと唱えよ』……」

さて、かにぱんお姉さんがかにの子であらせられるということはさておき、教典だ、教典。こういうのの形から入るってのは悪くないはずだ。多分。俺は心の赴くままにどんだん文言を書き留めていく。『かにぱんの右脚をもがれたら左脚も差し出しなさい』『人はかにぱんのみにて生きるにあらず。バランスの良い食事と適度な運動を！』『かにぱん（かにぱんを褒め称えよ、の意）』『かにぱんを自分のように愛しなさい』……。

……何故か自分の中で正気が消えていく感覚がある。何故だ。おかしいな。「ちよつきんちよきちよきってというのは何？ タスク様の世界の魔法？」

自らの狂気と向き合いつつ唸っていたところ、エピが横から疑問を寄越してきた。いい質問だ。俺を一旦正気に戻してくれてありがとう。

「ああ。かにぱんお姉さん直伝の魔法の言葉だ。よって『かにぱん美味しいぞ教』における聖句とも言える」

「せ、聖句……」

「そうだ。聖句だ。そしてこう唱えろと俺達のハートのもやもやはかにぱんお姉さんがチョッキンしてくれる。或いは闇に葬り去ってくれる」

「闇に葬り去ってくれるの!？」

そうだ。かにぱんお姉さんは『チョッキンチョコキチョコキ』でハートのもやもやをチョッキンしてくれる。若しくは闇に葬り去ってくれるのだ。どうだ？
中々に……中々にクレイジーだろ？

さて。そうしてまた教典の素案作りに戻った俺だが。

「つまり、タスク様ってこの世界に来なかったら、かにぱーちゃんの布教、しなかつたんだね」

ふと、エピがそう言うので考えてしまう。

俺は元の世界でかにぱんを愛しつつ、かにぱんの布教活動などは特にしていなかった。というか、この世界に来て石をパンに変える能力などというものを手に入れてしまったからこそ、ここぞとばかりにかにぱんを出しまくって布教しているというだけなのである。

そう考えると、ちよっと運命のいたずらってかんじがするな。

俺はこの世界に来なければ、かにぼんの布教をしていなかった。そしてこの世界も、かにぼんを知らないままだった……。

「そうだな……そう考えると異世界に来ちまったのは悪いことじゃなかったかもしれないな」

俺は運命のいたずらに感謝しつつ、この世界に来てからのことを振り返る。

やっぱりここに来てよかった。かにぼんの布教し放題だし。まああんまり成果は出てないが。

まあそれはそれとして、少なくとも、パン食い放題だし。いやまあ、若干食傷気味だが。

でも人助けもできてるし。その分環境破壊もしている気がするが。
……。

まあ、色々考えちゃうことはあるが、そういうのは全部チョッキンチョッキンだ。ハートののもやもやは全てチョッキンして闇に葬り去るのだ。葬り去りたい。ジーザス。

「それで結局、教典ってどうするの？」

「宗教戦争を招かない為にも、『汝かにはんを愛せよ』にとどめておくことにするか……」

エピも見ている前でメモ用紙に『汝かにはんを愛せよ』と書いてみた。

……最早教典じゃねえ。俺はそつと、メモ用紙を破り捨てた。

「布教って、難しいな……」

「そうだねえ、タスク様……」

布教って、難しい。俺に広報は向いてねえ。

そう思い知った、昼下がりの馬車の中の出来事であった。



お読みいただき、ありがとうございました！